

公開フォーラム

in 綾町

綾照葉樹林の 生物多様性と恵み

2019年11月30日(土)

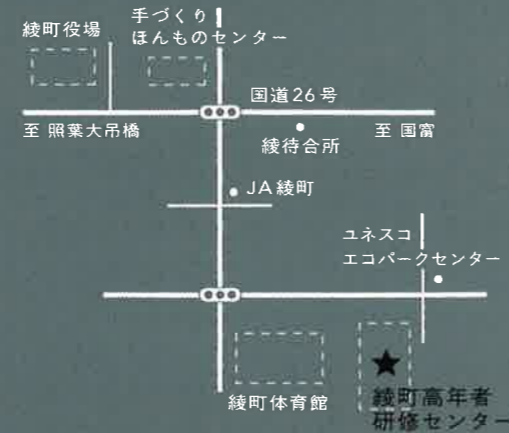
開場 12:30

会場

綾町高年者研修センター

綾町大字南俣 546-1
(宮崎交通綾待合所から徒歩5分)

MAP



*駐車場が少ないため公共交通機関のご利用、
またはお乗り合わせにてご来場ください。

PROGRAM

- 13:00 開会
- 13:15 講演1: 真鍋 徹
- 13:40 講演2: 山川 博美
- 14:05 講演3: トークセッション 井ノ口 三郎
- 14:30 ポスターセッション(1時間)
- 15:30 講演4: 朱宮 文晴
- 15:55 講演5: 谷重 和
- 16:20 総合討論
- 17:00 閉会

講演 1

「綾の森と対馬の森」

～日本を代表する照葉樹林をくらべる～

真鍋 徹 まなべ とおる
北九州市立自然史・歴史博物館

人手がほとんど加わっておらず、かつ広い面積を有する照葉樹林は、ほとんど残っていません。良好な林の条件といえるこれら2要因を有する綾町の林は、日本の照葉樹林の本来の姿を今に伝える極めて貴重な存在です。一方、長崎県対馬市の龍良山(たてらやま、標高約560m)にも、両要因を有する照葉樹林があります。1923年に「龍良山原始林」として国の天然記念物に指定されたこの林は、“山”そのものがご神体とされてきたことなどのため、スダジイやウラジロガシ、イスノキなどの巨木が生育する林として守られてきました。本フォーラムでは、日本を代表するこの2つの照葉樹林の異同などをご紹介します。

講演 2

「綾の森の動き」

～綾リサーチサイト30年間の調査結果から～

山川 博美 やまかわ ひろみ
森林総合研究所九州支所

森林総合研究所では、森の動きを解明するため1989年(平成元年)に綾の照葉樹林に4ヘクタール(200m×200m)の調査区を設定し、樹木の生死や成長量について観察してきました。30年のなかで起こった大きな出来事は1993年(平成5年)の台風13号の直撃です。この台風は再来間隔が100年程度とされる非常に大きなもので、綾の森も非常に大きなダメージを受け多くの樹木が倒れました。樹木が倒れた後の林冠には大きな穴(ギャップ)が開き、その後そのなかで新しい樹木が芽生え、森が少しずつ再生していきます。このような枯死と再生の繰り返しは絶えず森では起こり、森が動いています。では、綾の森は30年間でどのように動いてきたのでしょうか。この森の動きについて紹介します。

講演 3

トークセッション

「照葉の森が育む山の暮らし」

井ノ口 三郎 いのくち さぶろう 綾町在住
木佐貫 ひとみ 聞き手

一年中緑の照葉樹林ですが、四季折々に変化する自然のなか、その昔、たくさんの生きものとともに人は山で暮らしていました。野菜がよく育った焼畑の自給自足生活、多古羅の運動会で高下駄を履いた青年団長時代、川中周辺を歩き回った営林署の仕事。特に山中に暮らした青年までは、とにかく朝から晩まで、ある時は明け方まで、動物を追いかけ、川で遊び、大変なことも多かったけど本当にいきいきとして楽しかった。その生活体験のひとつひとつは色あせることなく、今でも心の深いところの躍動をともなって思いだされます。

講演 4

「綾の照葉樹林プロジェクトから 綾ユネスコエコパークへの系譜」

～綾の照葉樹林とその恵みを活かした
市民活動の広がり～

朱宮 文晴 しのみや たりはる
日本自然保護協会

綾町における開発をめぐる自然保護問題から転換して官民協働の照葉樹林復元プロジェクトである「綾の照葉樹林プロジェクト」が発足してから10年以上が経過しました。その後、半世紀以上に及ぶ自然生態系農業や科学的な根拠を示す綾リサーチサイトでのモニタリング調査などの取り組みがユネスコにより評価され、2012年綾ユネスコエコパークが誕生しました。2016年に綾町民向けに行われた意識調査や2017年に行われた綾の照葉樹林プロジェクト10年評価の結果を紹介します。一方で、もともと自治公民館活動など市民による活動が活発に行われていましたが、外部に関わる外発的な活動と並行して市民による内発的な活動の萌芽が見られるようになり、多様な広がりを見せています。

講演 5

「ヤマビルの吸血被害やマダニによる 感染症はどうして全国に拡大したのか？」

谷重 和 たにしげかず
ヤマビル研究会

ニホンジカ(以下シカと略す)の異常な個体数増加に伴う森林被害が、日本各地で深刻となっています。シカはこの25年間で10倍に増え、2015年の推定生息数は約304万頭。2017年の日本の森林被害面積は6000ヘクタールに達し、その森林被害の大部分は(74%)シカの食害によるものです。林床に生えている豊富な下草がシカに食べ尽くされ、地表がむき出しになっています。奥山に下草がなくなるとシカは山を下り、里山や人家周辺にまで草を求めて降りて来るようになりました。ところが、シカにはヤマビル・マダニが多く付着しており、シカと共に全国各地に運ばれて拡がりました。